



少年



北杜夫

中央公論社

少年

©一九七〇年 検印廃止

定価二八〇円

昭和四十五年十月三十日初版印刷
昭和四十五年十一月五日初版発行

著者 北 杜夫

発行者 山越 豊

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一一

電話(五六一)五九二二(代)

本文整版印刷 三晃印刷

カバー・扉 大熊整美堂

製本 協和製本



1970年

中央公論社刊

少

年

挿画 宇佐美爽子



ゆうぐれ、川原の土手の草のなかに、ぼんやりと寝ころんでいた。見あげる空が突きぬけてひろかった。

川水の音を聞きながら、ぼくは考えた。空のふかさについて。そのふかさにも時間について。時間のひとすみにうごめく人間について。

そしたら思わずくしゃみ嚏がでて、ぼくというちっぽけな人間なんか、世にもつまらなく思われた。そこらにころがっている木の根っこと変りがない。そんなふうにして、ぼくはたそがれてゆく空のかげりを長いあいだ眺めて



いた。このまま木の根っこになってしまえばよい。わざと、木の根っここのふりして、じっとしていた。

ところが、やぶ蚊が一匹二匹と耳もとでうなり声を立てはじめた。ズボンからはみでた足を喰われて、ぼくはもじもじと軀みをうごかし、ほとんど木の根っここの状態を中止しようとした。すると頭のうえをヒュッと掠めたものがある。うす闇にまぎれて見えなくなったと思うと、またくると向きを変え、ぼくのうえをヒュッと通る。一匹の中型のヤンマだった。きつと蚊をとっているのだろう、電光形にジグザグのコースをとりながら、忙しくあたりを飛びまわっている。ぼくはじっと息をこらした。ヤンマをおどかさないうちに、ふたたび木の根っここと化したのだ。

そのうち、おどろいたことに、ぼくのまわりから蚊のうなり声がまったく聞えなくなってしまった。みんなヤンマが食べてしまったのだろう。ヤンマはぼくの鼻先すれすれにヒュッと通りぬけたり、危うくぼくの腹にぶ

つかりそうになつては翹音はねおとをたてて方向を変えたりした。それを見ていたら、ぼくはなんだか悲しくなつてきた。ヤンマもやっぱり、ぼくのことを木の根っこのように扱つたからだ。ぼくはもぞもぞと身体を起して、枯草のくつついたズボンをはたきながら立ちあがつた。ヤンマはびっくりして、もちろんどこかへ消えて見えなくなった。

ぼくは、二、三度首をふつてから、のろのろと寮のほうへ引返した。反対側の土手を降りようとすると、草むらのなかから人間の姿がふいに立ちあがつた。ひとりの男とひとりの女である。夕闇に白いおんなの顔と困惑の瞳が、極度にぼくを狼狽させた。

大空について。昼は消える星たちについて。せっかく川原で考えたこともまるきり忘れてしまった。

なにがぼくの頬を赧あからめさせたのか。ぼくは考える気がしなかった。なにより腹がへつていたからである。

*
* *

毎日、居ても立ってもいられないもの寂しさ。生きて鼓動している自分のからだだが、やりきれなく寂しいのだ。ふと皮膚をふるわす、もののゆらぎ。神経をそよがす、もののかげ。このむずがゆい変化はどこからくるのだろうか。ぼくは大人になりつつあるのかな。

ぐるりを山に囲まれた信州松本の、旧制高等学校の寮にはいつでももう二カ月近くになる。ぼくは早生れの四修だから、まだ十七歳、寮にはぼくみたいな子供は一人もない。たいていひげが生えて、髪をのばして、なかにはおじさんみたいなのもある。上級の委員なんかみんな大人に思える。

入寮のとき委員長が、

「来年は学制改革であるから、君らが旧制における最後の高校生だ。日本

で最後の高校生として、また思誠寮最後の寮生として、最後をうつくしく飾って貰いたい」

と、最後だ最後だと、十ぺんくらい繰返した。

それから昔の高校気質というものは虚偽であると言い、彼らは前世紀の遺物であると言い、「観念の空転」とかいう言葉を八ぺんくらい使った。つくづく、へんなどころだと思った。

実際、おかしな人間ばかりいるようである。たとえば、隣の部屋に加島という一年生がいるが、彼は全人格をひとつの靴に捧げていると言ってよいだろう。加島君はしょっちゅうポロポロの服を着ているくせに、誰でも見惚れてしまうような、黒光りのする、すばらしい短靴を所有している。持っているだけで、決して履きはしないのだ。それでどうするかというと、机のわきの本棚のうえに飾っておいて、わずかな閑にも布片でみがいている。それもフランネルのやわらかい布で、そっと撫でるように擦まさってみた

り、ときには素早くサツサツとこすってみたり、首をかしげて仔細げに匂いをかいでみたりする。誰かが「凄え靴を持つてるじゃないか」とひやかすと、彼はさも嬉しそうに目尻に皺をよせて、「歩くとキュツキュツと鳴るぜ」と、白痴みたいなことを言うのである。だが、彼がはたして本当にその靴を履いたことがあるかどうか、疑わしいものだ。靴の手入れなんかについては滅法くわしい。加島君はいつもその靴を本棚のうえに飾っておかないと落着けないらしいのだが、それでも日光が直射したりすると、電光石火の早わざで靴をかくしてしまふ。万が一その靴が紛失してしまつたとしたら、おそらく彼は自殺するのではないか。今日もちょっと部屋をのぞいてみたら、加島君は窓際に位置して、両手で一方の靴を捧げもち、しきりと左右にゆりうごかしていた。何をしているのかと思つたら、うす日が靴の磨きあげられた肌にたわむれるさまを、心ゆくまで楽しんでゐるらしかつた。アツパレな男だと思つた。

また、ぼくの部屋の住人の一人である生田君のことも、ぜひ書いておかねばなるまい。彼もぼくと同じく、四修で入学して、みんながずいぶん沢山の本を読んでいるらしいことにびっくりしたわけだ。そこで生田君は慌てて本を読みはじめた。寮のなかでも目に立つくらい熱烈に読書にはげんだのだが、やがて彼は奇妙なことをやりだした。つまり彼は、自分がほとんど本を読んでいないことを非常に気に病んだものだから、なんとかして人並のレベルに達しようとする、また自分がどのくらい他の人々に追いついたかをハッキリさせようとして、次のような方法をとった。まず彼は一枚の画用紙にていねいに線をひいて、哲学、文学、科学、という具合に見出しをつけ、今までに何冊を読んだかわかるようにした。彼は歴大な書籍を読破する決意をもっていたのだらう、いちいち本の名を書くようなことはせず、一冊読むとその部門の欄に一本棒をひいて、「正」の字をならべるように計画したのである。ところがひと月経っても、本の数はなかなか

殖えなかつた。こんなことでは画用紙の空白が埋まるのは何年先になるのか見当もつかない。生田君はいらいらしてきた。ある日のこと、彼は五百ページもあるぶ厚い小説をやつと読み終え、さてくだんの画用紙に一本の棒を引いたところ、急に莫迦々々しくなってきた。おれはこの本を読むのに何日かかつたらう、と彼は考えた。四日間もかかっているじゃないか。それなのに棒一本ではあまりに情けない。この本は癩しやにさわるほど、やけに厚いし、立派に二冊分の分量があるのだから、いっそのこと二本、棒をひいてやろうか。生田君は二本ひきたくつてたまらなかつたのだが、そうすればインチキをすることになるので、からくもそれを思いとどまった。その代り「正」の字をつくることにはすっかり愛想をつかしてしまったものだから、今度は新手の方法を案出した。つまりページ数で記入することにしたのである。これなら正確だと彼はほくそ笑んだのだろうが、それからが大変だった。生田君は今までに読んだ本のページ数をしらべて総計を

だし、新しく読むたびにそれを加えてゆくことにした。すると数字はたちまち殖えてゆくので嬉しくってたまらなかった。もう画用紙なんぞでは駄目になったから、新しく大判のノートを買ってきて、毎晩計算に忙しいのである。だから近ごろでは、本屋でちょっと立読みしても手帳をだして書きつけているし、「今日は全部で三百四十八殖えたぜ。しかもそのうち二百五十は六ポイントの活字だけ」なんて、どうも言うことが気違いじみてきた。なによりもぼくが怖れるのは、生田君がこの方法にも不満を覚えるにちがいないことである。六ポイントなんて言いだすところを見ると、どうも危い。もしも彼が無類にこまかい活字の、しかも三段組かなんかの本に出会わしたとしたら、ページ数制度にも腹を立ててしまうかもしれない。そして、今度は活字数でゆこうなどと考えだしたらどうだろう。ちょっと本屋にはいっても、手帳を出して四千三百六なんて数字を記入しなければならぬだろうし、それこそ朝から晩まで計算に忙殺されてしまうことだ